

【毎日新聞 2011年9月13日 地方版】

原発に潜むリスク:フクシマから半年/2 /福井

<http://mainichi.jp/area/fukui/news/20110913ddlk18040682000c.html>

◇敦賀ともんじゅ、直近に活断層 東大地震研・瀨瀨教授「福井県は特に危険」

「あんなに活断層がたくさんある所で、もう原発は止めた方が良いでしょう。活断層のほぼ真上に原発がある所もあり、分かっていないものもあると思う。日本全国どこでも危険だと思いますが、福井県は特に危険だと思う」。東京大地震研究所の瀨瀨(こうけつ)一起教授＝応用地震学＝は、取材にこう言い切った。

原発の耐震安全性を検討する国の作業部会で09年から主査を務め、国内各原発の耐震安全性審議の取りまとめ役だったが、福島第1原発事故後の今年7月に辞任した。その理由は「全く想定外のマグニチュード(M)9.0の超巨大地震が発生し、信念の根拠となるべき科学に限界があることが明らかになったから」という。事故前は、科学的に評価すれば大丈夫と考えていたが、「今となってはあやふやなものでしたね」と力なく語る。

瀨瀨教授は「中でも敦賀原発(敦賀市)ともんじゅ(同)が一番に止めた方がいい」。直近に活断層があることを挙げ、「従来の常識から判断できないようなことが起こらないとは言えない」と語った。

活断層が各地に存在する日本列島。県内でも多くの活断層が知られ、県によると電力3事業者が原発への影響を想定している活断層は19カ所に上る。各事業者は、活断層について科学的に予測される最大の揺れ「基準地震動」を各原発で策定して耐震性を評価し、国から「評価は妥当」とのお墨付きを得てきた。しかし、その委員から揺れを心配する声上がる異例の事態だ。

瀨瀨教授が指摘した2断層は、敦賀原発の敷地内を通る浦底(内池見)断層＝約18キロ＝と、高速増殖原型炉「もんじゅ」付近を通る白木丹生断層＝約15キロ。共に建設当時には存在が明確ではなかったが、後に活断層と判明し、原発との距離の近さが問題になっている。

浦底断層が“浮上”したのは、91年だった。全国の活断層を網羅した学術書「新編日本の活断層」で約3キロが「確実な活断層」として認定されたのだ。改訂前の「日本の活断層」(1980年出版)では「活断層の疑いがあるリニアメント(線状地形)」と位置付けられたが、その後の研究で活断層であることが確実になった。M6.9の地震を起こすと想定し、日本原子力発電は敦賀原発の最大加速度を800ガルと評価している。

白木丹生断層も、原子炉設置許可時には「活断層ではない」(経済産業省原子力安全・保安院)と評価していた。当時の動力炉・核燃料開発事業団(動燃)は80年の設置許可申請以来、1度も詳細調査をせず、08年3月に国の新耐震指針に基づいて実施した原発の耐震性再評価の中で、初めて活断層と認定した。住民が原子炉設置許可の妥当性を巡って提訴した「もんじゅ訴訟」が結審した後だった。同じくM6.9の地震を想定し、日本原子力研究開発機構はもんじゅの最大加速度を760ガルと評価している。【安藤大介】